

敷島小学校 令和7年度「学校関係者評価書」

令和8年2月26日(木)

(敷島小学校) 学校関係者評価委員会作成

第1回 学校関係者評価委員会

実施日：令和8年2月13日(金) 午後2時40分～3時30分

会場：敷島小学校 校長室

参加者：学校関係者評価委員(4名)

田村令子様・渡辺光順様・花形一満様・笠井昭平様

学校側(2名)

教頭 中山素・教務主任 宮島芳文

I 学校側から提案された内容

「令和7年度 敷島小学校自己評価書」について

- 1 達成状況について
- 2 改善策について
- 3 成果と課題について

II 協議された主な内容

※全体評価

- 1 学校教育目標に関して・学校経営について
- 2 学校運営について
- 3 学習指導について
- 4 生徒指導について
- 5 地域との連携について
- 6 学校の特色に関して
- 7 創甲斐教育について
- 8 まとめ(成果と課題)について

<学校関係者評価書>

I 全体評価

○教職員、児童、保護者とも肯定的な回答が多いことが一番の成果だと思う。ただし、否定的な回答があることも事実であり、評価書にあるように少人数の意見も見過ぎることがないようにして頂きたい。さらにそのための適切な指導をより具体化するとよいのではないか。

○児童、保護者、教職員が連携している様子がよくわかり、学校がうまく回っている感じがする。また、教育目標や学校経営方針(プラン)が教職員に浸透している様子が伺え、働きやすさと働きがいの両立した学校づくりが実現できていると感じる。

II 特 徴

(1) 学校教育目標・学校経営について

- ・肯定的な回答が多く、学校教育目標の達成に向けて全職員の意識の高さと行動力を感じる。PDC Dサイクルを生かすことの数値が以前より高く出ており、学校の努力がわかる。

(2) 学校運営について

- ・信頼関係の構築は職場の基本ともいえる。校長先生のリーダーシップのもと、今後もより良い関係を作っていただきたい。肯定的な回答が多いが、数値を細かく追っていくと課題が見える。「危機管理マニュアルへの理解」「校内研究・研修への主体的参加」「校務支援システムの活用」である。課題をもった児童への指導の多さから思うようにできない壁を感じる。

(3) 学習指導について

- ・「先生がよく勉強を教えてくれる」「授業が楽しい」と回答する児童の多さは学校にとって何よりも重要なことと思う。ただ、ここでも細かく見ていくと、今後の指針が立つのではないかと思う。「ICT活用」と「協働的な学び」である。本校でも校内研究のテーマにも位置づけて推進している。ICT環境について家庭ではどうであろうか、保護者への負担等により、児童への偏りが生まれまいようにご配慮いただきたい。家庭学習の在り方については、タブレットを用いた家庭学習も増えてきた。宿題等についてさらに柔軟な家庭学習について考える時期なのかと思う。

(4) 生徒指導について

- ・教職員の高い肯定的な回答率に加え、児童の規範意識の高さ、真面目さは本校の落ち着いた教育環境の成果だと思う。一方で問題を抱えていて、相談できる先生を待っている児童も少数ながらいる。児童アンケート結果を見ると、「先生に質問する」「自分の意見を言う」の項目は他に比べてC、D回答が多い。自信をもって自分のことを表現できる児童の姿をさらに望んでいきたい。

(5) 地域との連携について

- ・コロナ禍の収束により、地域行事が復活して児童が楽しく参加している様子が伺え、ほほえましく思う。また学校、学年だよりはHPなどで学校からの情報発信は十分に行っているが、多忙などで保護者が受け止めていない場合も考え、これからも積極的は発信を続けてほしい。

(6) 学校の特色・創甲斐教育について

- ・読書活動が盛んであることは本校の特色であり、伝統とも言えるのではないか。ただし、児童アンケートで読書時間の短さとスマホ等の使用時間の増加は見逃せない。学校でも様々な読書活動を行いながら、家庭との協力も得ながら読書の楽しさを児童にも知らせていきたいと切に思う。

III 今後の課題として意識されたいこと

- 「ほめて伝えて育てる」教育活動と「いじめは絶対ゆるさない」校風づくりのさらなる推進
 - ・人は人との関わりの中で成長していく。コミュニケーションを通じた相互理解や集団から生まれる感動体験や多様な児童への柔軟な対応によって、児童と一緒に教職員も成長できる。時代や文化が変わっても信頼関係づくりや人間の基本は変わらないので、今後もそのことを念頭に教育活動を進めていく。
- 「若手教員」の育成と教職員一人一人の資質・能力の向上に向けての取組の充実
 - ・教員不足による学校運営の難しさや児童対応への困難さが現実問題としてある。教職員の質を高める校内研究や研修を続け、新採用者等の若手育成にもさらに力を入れて取り組んでいく。
- 「幼保小連携」のさらなる強化
 - ・幼稚園・保育園との情報交換は毎年行っているが、児童の実態把握や理解不足があり、学級編成が難しい現状がある。さらなる細かい情報交換や情報共有の必要性を実感し、また小一のスタートカリキュラムの重要性を再認識し、今後の教育活動にあたっていく。

※特記事項 なし